

博物館 アラカルト 29

菅茶山と田内月堂たのうちげつどう – 浴恩園招宴のその後 – よくおんえん

文化12年(1815)の2月、江戸にいた菅茶山は、江戸の築地にあった松平定信(元老中で前白河藩主)の屋敷に招かれました。「当代随一の詩人」として漢詩を求められたのです。屋敷にあった回遊式庭園の浴恩園を巡り、富士を眺めて互いに歌や詩を作りました。その時、定信の近侍として参加していたのが、白河藩士・田内月堂です。通称を主税ちから、名を親輔ちかすけ、月堂と号しました。月堂は、後に茶山の肖像画を個人的に所有するなど、茶山に対して深い敬愛の念を抱いていました。

月堂は、その数年後、築地にあった浴恩園に転居します。転居した月堂は、茶山に宛てて次のような内容の手紙を書きました(図1)。

「このたび、浴恩園に引越しをしました。先生が先年、浴恩園にいらした時にしばし休憩をされた蓬瀛台ほうえいだいの近くです。少しは鞆の浦に近づいた心地がします。この風景を星野文良ぶんりょう(白河藩の絵師)に描かせてお送りしますので、是非、先生に漢詩を詠んでいただきたいので、お願いします。」

星野文良が描いたのが、「海浜眺望図」(図2)です。手前に不崩岸くずれずのきし、その右手に「わが酔月楼このふもとにあり」と記されています。さらに遠くを見渡せば、「上総墨戸かすさすみどの浜」「安房かぎりの山」「本牧ほんまき」などが記されています。

茶山は月堂からの依頼を受け、この絵を参考にして、漢詩を作ります。『黄葉夕陽村舎詩』遺稿巻四に「田主税移居不崩岸」という七言絶句があります。「隠史家を移て岸稜に住し、家は江に臨み色澄澄と碧し、懸江はるかに対す南山の色、岸嘉名を賜りて永く崩れず」

その後も度々、手紙のやり取りをしています。文政7年(1824)に月堂は、『浴恩園図并詩歌巻』(図3)を作成して、茶山のもとに贈っています。

文化12年2月6日の1日だけの招宴でしたが、その後も二人は詩のやり取りをしたり、浴恩園の梅を接木にして贈られたりしています(詳しくは博物館ニュース77号)。そのうちのひとつがこうした漢詩の依頼でした。神辺と江戸という遠く離れた二人の交流は茶山の死の間際まで続いています。

6・7月のスポット展示では、田内の居宅にまつわるエピソードについて、当館の通史展示室内の展示コーナーで紹介されます。是非、御覧ください。

(主任学芸員 岡野将士)

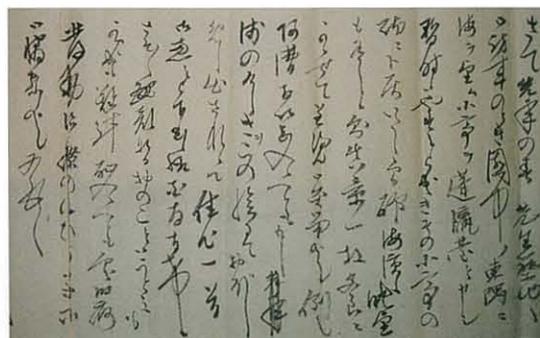


図1 菅茶山あて田内月堂書状(部分)



図2 海浜眺望図(星野文良画)

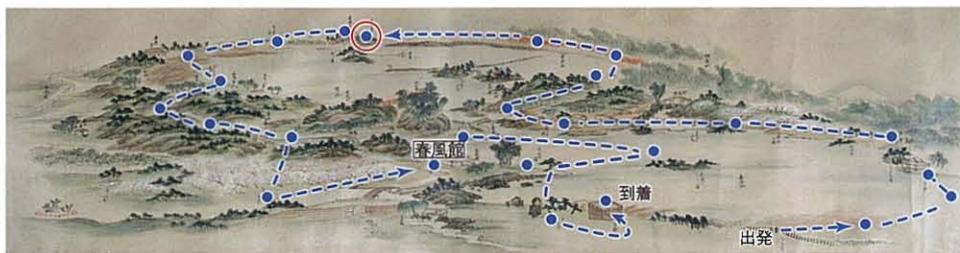


図3 『浴恩園図并詩歌巻』のうち「浴恩園図」(董列画)
青線は文化12年に茶山が訪れた際の散策ルート。途中「春風館」で定信と合流した。赤丸は田内の居宅の位置。図2は、ここからの眺めを描いたもの。